

がんじん  
鑑真

二〇一三年六月、奈良県の唐招提寺で「お身代わり像」が公開された。この「お身代わり像」は、国宝である「鑑真和上坐像」に似せてつくられた像で、全国から訪れる参拝者に常時公開できるように、鑑真がなくなつて一二五〇年になる年に合わせてつくられたものである。「鑑真和上坐像」は、唐（昔の中国）の僧、鑑真の弟子が鑑真の生前につくり上げたもので、今回、本物と同じ材料を使って同じ方法で「お身代わり像」はつくられた。つくった方は、「制作の終わりのころは鑑真の弟子になった思いだった。」と話されたそうだ。

鑑真は、中国の唐の時代に揚州というところで生まれた。十三才のときに父に願つて僧になつた鑑真は、やがて、多くの弟子をかかえ、名僧として仏教のために力を尽くすようになった。ある日、鑑真のもとを、日本から来た二人の僧が訪れた。

「日本に来て、仏教の教えを広めていただけじゃないでしょうか。」

日本には、早くから仏教は伝わっていたが、それを正しく教えてくれる僧はいなかったのだ。鑑真は、その場にいた大ぜいの弟子たちに、



お身代わり像

撮影：飛鳥園



「もっともなたのみだ。だれか日本に行こうという者はいないか。」  
とたずねた。しかし、遠い日本に命の危険をおかして行くとはだれも答えられない。やがて鑑真は言った。

「それならばわたしが行こう。」

弟子たちはおどろいた。やがて、鑑真の決心が固いことを知った二十一人の弟子たちが、おともをして日本に行くことになったのだった。

しかし、そこからが大変だった。鑑真が日本に行くことをおしんだ人たちの妨害にあい、せっかくつくった船を役人に取り上げられてしまった。新しい船を買い入れ、何とか船出をしたものの、今度はあらしにあってそう難してしまふ。寒さに加え、うえとかわきに苦しめられた鑑真たちは、やっとのことで助け出されたのだった。

そのとき世話になった寺でも、鑑真はひまさえあれば人々に仏の教えを説いた。そんな鑑真に、寺の僧たちはずっとこの地においてほしいと願った。

